教育 2014

地域に生きる大学 中

医療IT 世界最先端

遠隔地の患者も診察可

香川大・原特任教授ら

東北沿岸部を大津波が襲った2011年3月11日。高松市の医療ITベンチャー「ミトラ」のシステムエンジニア河野弘就さん(45)は、必死にデータのバックアップを取っていた。

岩手県内の妊婦約7500人の健診データなどを病院と市町村が共有する、県周産期医療情報ネットワーク「いーはとーぶ」の開発者。盛岡市のデータセンターは、2時間ほど停止して復旧したが、その後の被害拡大に備え、香川にデータを送っていた。

震災で威力発揮

東日本大震災では、膨大なカルテや投薬歴が失われた。だが「いーはとーぶ」に同意していた妊婦は、災害派遣医療チームの拠点の岩手県遠野市で継続した診療を受けることができたという。

緊急時にバックアップデータを香川に送ることができたのは、県が全国に先駆けて03年に導入した「かがわ遠隔医療ネットワーク」(K－MIX)があったからだ。

「とことん挑戦」

「昔は医療データを病院外に出すのはタブーだったが、どこに置くのが安全かは時代によって変わる」

6月に高松市内で開かれた遠隔医療に関するシンポジウムで、原量宏・香川大特任教授(70)はこう強調した。K－MIXの「生みの親」で、日本遠隔医療学会長も務める。

1980年、香川医科大学(現・香川大医学部)に産婦人科医として赴任した。胎児死亡率が高かった香川にようやく開学した医大として、周産期医療に力を入れていた。妊婦データのIT管理を研究していた原さんは、胎児の心拍を在宅管理する小型装置などを開発。95年に医大と地域の基幹病院をつなぐ周産期電子カルテネットワークを始めた。これがK－MIXの基になった。

現在、K－MIXには県内外115の医療機関が参加する。診療所で撮影したX線やCT画像をネットを通じて中核病院の専門医に送り意見を求める仕組み。県医師会が運営し、年約3千件の利用実績がある。検査や投薬の重複を防ぐため、中核病院の電子カルテを診療所に提供する新システムも稼働した。

原さんは「大学、県、医師会が良い関係の中で問題意識を共有できた」と振り返る。「長年の蓄積で香川は医療ITの人材も設備も世界最先端レベル。介護との連携などITをとことん活用すればどこまでできるか挑戦したい」

映像を見て指示

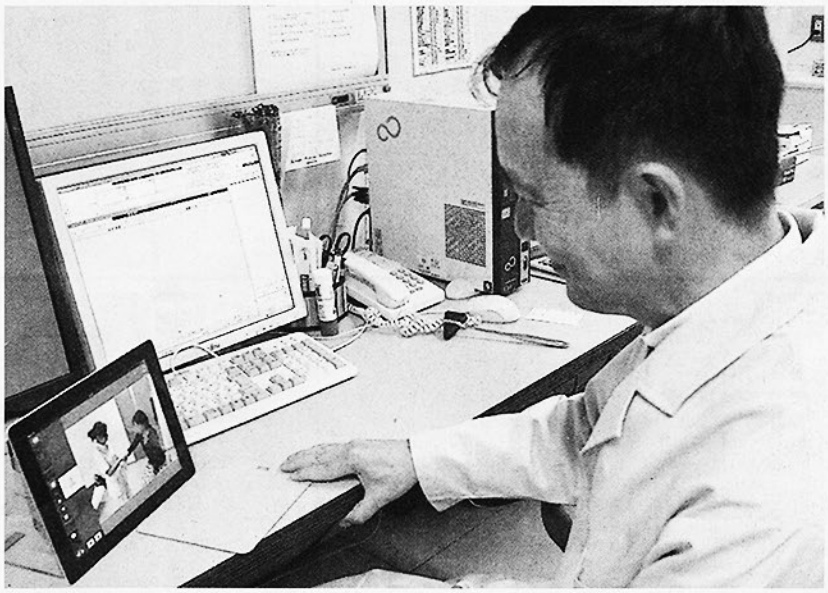
県はK－MIXのサーバーを利用して独自のテレビ会議システム「ドクターコム」も開発した。3年前には、医師法の対面診療原則を緩和する医療福祉総合特区に認定された。

多度津町の佐柳島、高見島などの診療所を巡回する県立中央病院の川田洋一医師(56)もドクターコム利用者の1人。週1回しか通えない島に、専門の研修を受けた看護師がタブレット端末を持って通う。送られて来た映像を見ながら必要な処置を指示する。

実際は通信状況によって、携帯電話や写真付きメールで対応することも多い。「今は試行錯誤だが、医者の顔が映って直接話せれば患者さんが多少は安心してくれる」と話す。

過疎化が進む地方、通院が難しい都市部の高齢者、医師と看護師の不足――。医療もITに頼る時代に向けた準備を香川がリードしている。

(多知川節子)



特区事業「ドクターコム」用のタブレット端末を持ち、県内のへき地診療所を巡回している川田洋一医師。操作に慣れるための練習にも取り組む＝綾川町の綾上診療所